

# 鈴木三重吉「赤い鳥」綴方成立史の研究

岡屋 昭雄

〔抄録〕

鈴木三重吉は、『綴方読本』（中央公論社 一九三五年十二月）を繼ぎ、三重吉の綴方指導（実践）の完成を示す。著書の前半に掲載された子どもの綴方はいずれも雑誌「赤い鳥」に応募されたものであり、三重吉が子どもの綴方の選評で強調したことは、「事実をありのままに綴る」という写生文の伝統に即したものである。文章を綴る行為そのものが人間形成となることを主張し、綴る技術にしても「子どもの綴方」に即し

て丹念になされる。

したがって、対象の真実、あるいは自己の内面の心理を正確にとらえ、その真実を綴るといふ営為が今日の人間の危機を救うことになることを主張したのである。

キーワード 写生・写実、見たまま、聞いたまま綴る、人間形成、

赤い鳥、実感

はじめに

最近出版された豊田正子の『新編 綴方教室』（岩波書店一九九五年七月）に於いて編者の山住正己は解説で綴方教育の歴史を振り返りつ次のような示唆的な発言をする。

……「作文」が綴方に改められたのは、一九〇〇年の小学校令による。その第三条に綴り方が読み方、書き方とともに国語の一分野としてあげられ、「読み方又ハ他ノ教科目ニ於テ授ケタル事項、児童ノ日常見聞セル事項及処世ニ必要ナル事項ヲ記述セシメ、其行文ハ平易ニシテ旨趣明瞭ナラシメンコトヲ要ス」と規定された。これは手紙文中

心の実用向き作文からの転換であり、題材は広げられた。

しかし大正デモクラシーの下、自由主義教育が提唱され、付属小学校や私立学校で多くの新しい試みが行なわれ、それが公立学校をも動かした。学校外では夏目漱石の弟子鈴木三重吉の主筆する『赤い鳥』

（一九一八年七月―一九二九年三月、一時休刊、三一年一月―三六年八月）が、泉鏡花・島崎藤村・芥川龍之介・北原白秋ら第一線の作家・詩人の協力をえて、童話・童謡の創作・普及の運動をすすめた。同誌ではこれと並んで子どもの自由な表現活動に注目し、綴方を三重吉が、詩を白秋が担当し、教師を目ざめさせ、その教師が子どもの表現活動を促していった。綴方でいえば、観念的な内容と美文調から、リズムとヒューマニズムを基調とした作品への転換であった。

三重吉は、綴り方を文字上の表現の練習と見るのは平浅な考えであり、「私は綴方を、人そのものを作りととのえる、『人間教育』の一分課として取扱っている」（『綴方読本』一九三五年）と述べていた。これによって綴方は小学校令の規定をこえて大きく前進したのである。

つまり、山住は、綴方教育の発展を大正デモクラシーの自由主義教育の影響と位置づけつつ、『赤い鳥』綴方教育が児童の自由な表現活動を促した、と評価し、今までの手紙文（書牘）指導の持つ観念的な内容と美文調から、リズムとヒューマニズムを基調とする作品へと転換させたというのである。さらには鈴木三重吉は、綴方を文字上の表現の練習と見る浅薄な考え方から人間教育の一分課と捉えているのである。したがって、綴方を人間教育の一分課として捉えているところに三重吉の慧

眼があったといえるであろう。山住は、豊田正子の『綴方教室』の作品を「生活綴方そのものであった。」と捉えるのである。にもかかわらず豊田正子を指導した教師である大木頭一郎・清水幸治の両名は生活綴方運動には参加していなかった、と「解説」の三七二頁で述べる。

何れにしても今回は、鈴木三重吉の綴方教育の完成を示す『綴方読本』（中央公論社一九三五年一月）を主要には、第一次資料として、さらには雑誌「赤い鳥」を第二次資料として本論文を纏めることとする。

### 一 「赤い鳥」の綴方教育の成立まで

前述した如く、豊田正子の綴方が、大木頭一郎の指導により、大正七（一九三二）年四月の雑誌「赤い鳥」に「うさぎ」が初入選、以後七編が入選する。したがって、後期「赤い鳥」時代であるが故に応募した綴方は、生活綴方的な綴方も多く見られるようになり、三重吉の綴方教育に対する考え方も完成していた、と把握できる。

ここでは、先ず豊田正子の「うさぎ」を取り上げ検討することとする。

指導者の大木頭一郎は『綴方教室』（中央公論社一九三七年七月）の「前編に就いて」に、「赤裸々な生活記録のみが児童文の最上位に置かるべきであると。――私は、決して左様に云はうとは思はない。が、何よりも先づ『自分で物を見、自分で判断し、自分の言葉で心から物を云ふ』ことの貴さが教へられなくては、綴方を通しての人間教養なぞ望ま

れないことになつて仕舞ふ。如何に折り目正しい、端正な用語形式の運用が馴致されても、純真な児童の本性が徒らに成人の習慣、因習の底に埋没していかうものなら、将来への正しい成育が予約されるものではない。」と断言する。「後編に就いて」では、清水幸治は、「自由教育思潮の勃興に伴つて、下積みにされて忘られてゐたやうな綴方教育に『従来の仮空を排せ。児童の生活即綴方なり』との、炬火を掲げてより將に二十年。」と強調する如く、「自分で物を見、自分で判断し、自分の言葉で心から物を云ふ」ことの貴が教へられなくては、綴方を通しての人間教養を目指し、「従来の仮空を排せ。児童の生活即綴方なり」が綴方の目標であつたことである。

作品「うさぎ」の指導について大木は次のように述べる。

作品「うさぎ」は「赤い鳥」に入選した最初のものである。書いた時期から云ふと第一学期の終り、「おだんごやさん」以下四編の後に生れたのである。

豊田のやうに勝れた表現力を有つ児童は、この上、勝れた題材を探り当てることに努力しなくてはならない。平凡な題材の場合は折角骨を折つて綴つても結果が巧くないが、題材がよいと案外楽に効果を取られる。平凡な題材では何等感興を唆られることもないから、油が乗らず、熱が加はらず、従つて筆が伸び切らないのである。児童の脳裏に深い印象を止めてゐるやうな興味的なもので、相当動きに富んでゐるものが書き易いやうである。短い時間に終結するやうな事件で、事の発端から終末まで展開的要素を豊かにもつてゐるやうなものなら尚い、と思ふ。「うさぎ」を綴る前に、豊田は喜んでその梗概を話し

聞かせるのであつた。い、題が見つかつたと、云つて、如何にも得意さうであつた。

参考になると思ふので、鈴木先生の選評も添へて置くことにしよう。

うさぎ

おと、ひの日曜の日の夕方時分でした。私の家では夕はんのしたくをしてゐました。私は、そとで、光男を遊ばせてゐました。お父さんは、家で、大島の家、大きなやかんにハンダづけをしたり、とよをこしらへたりしてゐました。そのとき、お母さんはだれかによべたらしく、

「はい、なんですか」といつて、お勝手の手をやめて、一軒おいたおとなりの、おりえちやんの家の方へ行きました。すこしたちますと、お母さんが、

「正子や、ちよつときてごらん」といつたので、「はい」といつてうらへまはりました。さうすると、お母さんは、わらひながら、おりえちやんの家のをばさんに、「どうも、すみませんですね」といひました。をばさんは、

「い、え、い、んですよ」うちでね、あなかへいくんですの。私一人ぢや、なか／＼せわが出来ないんですよ。だから、あとはみんな売つてしまふんですの。でね、こ、だけの話なんですけれど、梅木さんのうちへもやらうと思つたんですが、あのうちは、大じんでも、けち

くさいから、やらなかつたんですよ。あの家へやつても、おからもけちをして少ししか食べさせないでさ、草もろくに食べさせないからと、いくらうさぎでもかはいさうだからね。おたくちや、お子さんが草ぐらゐとつてきますから、らくですよ。三ヶ月ぐらゐたつと子をうみますよ。子が一匹二十銭ですよ」といふと、お母さんは、「どうも、すみませんですね」といつてゐました。

私はお母さんの所へかけていつて、「なあに」といひますと、お母さんは、「うさぎを二匹もらつたからうちへもつていきな」と、いひました。私はうれしくなつちやいました。そして、おりえちやんの家のをぢさんがおさへてゐる自てん車のうしろの方を見ますと、小さな箱の中に、白と黒のうさぎがはいつてゐました。うさぎの大きさは、大人のげたぐらゐで、かはいらしいうさぎでした。わたしはうれしくて、たまりませんでした。それで、すぐに箱を家へもつていききました。家ではお父さんが、私が箱をもつてゐるのを見て、

「なんだよ、それは」とき、ましたから、「うさぎ」といふと、お父さんは仕事をやるのをやめて、お勝手にでてきました。そして、「ほ、う、い、うさぎだね」といひました。そのとき、お母さんが来て、

「あんた、子うさぎ一匹二十銭だつてよ」といふと、お父さんは、「この不けい氣に、二十銭に売れりや、わるくねえな」といつてわらつてゐました。私は、

「父ちゃん、うさぎ入れる箱買つてきてよ」といふと、「うん、よしきた」といつて、十銭たんすの上からとつて、おびの間にくるん

で、自てん車で市場の方へいきました。

まもなく、光男と稔が来ました。光男はうさぎのゐるのを見て、「うちやちやんだ。うちやちやんだ」といつてよろこびました。稔も「あれ、い、な、うさぎ、うさぎ」といつてよろこんで、はねまはりしました。お母さんはお勝手のごようをしてゐました。ジャブ／＼ジャブ／＼、豆をあらつてゐました。そのとき、お父さんがかへつてきました。お父さんは自てん車から箱をおろして、「さあ、箱を買つてきたから、これから、うさぎのはいるところをこしらへようかな」といひました。その箱には梨のゑがかいてありました。

私は、「母ちゃん、草とつてくるよ」といふと、「氣が早いな」と、お母さんにはれました。私は、「氣が早くともい、から、とつてくるよ」といつて金あみのざるをもつて、せりをつみにいきました。後から、稔も、光男もつてきました。稔は大あばりで、「こんどな、おれんちや、うさぎが、二つあるんだよ」と、どなりながら歩いてゐました。光男もまねをして、「うちやぎ、うんとゐるよ」とどなつて歩きました。

お湯屋の前の、草のたくさんはえてゐるところで、せりをとりました。稔も光男も、だまつて見てゐるので、「とつてくれないの」といつたら、「そんだつて、見にきたんだもの」と言つて、わらひながらにげていつてしまひました。私は一人でせりをつんで家へかへると、もう家では箱をつくつてしまつたところでした。お父さんは、私に、「わらをどうしようかな」と言つたから、「お米屋でもらつてくるよ」といつて、近所のお米屋で、わらであんでゐる、まるい俵のふた

を三つもらつて来ました。かへりがけに工藤さんにあひました。

「あたしんち、こんどうさがあるの」と言つたら、工藤さんは、「そうお、見してよ」といひました。それから、二人で話しながら家へかへりました。かへつて、工藤さんとわらをほごしました。工藤さんに、うさぎを見せると、「あらア、い、わね」といつてゐました。

そこへ稔がきて、「工藤さんも、うさぎをもらひなよ」といひました。お父さんが、箱の中をほうきでがらくやつて、「さあ、わらぐできたから、うさぎ入れな」といつたから、工藤さんと二人で、ほごしたわらを平べつたくして、その上にうさぎを入れてやりました。うさぎは、ちよつとの間、きよろ／＼してゐたが、やがて、小さな木と木の間からくびをだしました。

光男は大よろこびで、箱へさはつてみたり、うさぎをあやして見たりしてゐました。草をやるよ、よろこんで食べました。私が光男にせりを一本もたせると、「ちや、やるよ」といつて、うさぎの方へつんだしました。うさぎは、草をたべるとき、はなまでうごかして、もく／＼と、まるで、おばあさんが、かたいものを食べるやうでした。

### 選評

豊田正子さんの「うさぎ」は、四年生としては叙写が外廓的で、陰影が足りませんが、ともかく、すら／＼と渋滞なくかけてをり、終始うぶ／＼した純感さには、あまさせる、かはいらしい作篇です。

冒頭にお父さんが、よその家のやかにハンダづけしたり、雨樋をこしらへたりしてゐられたとあるので、家業もわかり、家の中の空気

が浮かんで来るのが儲けものでした。叙写としては、全篇の対話がすべていき／＼と実感的にかけてゐます。おりえさんのうちのをばさんの、兎をくれるについての長い対話や、もらつて来てからの正子さんとお父さん、お父さんとお母さんとの対話など、すべてがさうです。東京語での対話だけに、快感があります。

正子さんが、兎の大きさをたとへて、大人の下駄ぐらゐだと言つたのは、子供らしくておもしろい。お父さんが、「よしきた」と箱を買つて来るのを請け合はれ、十銭、たんすの上からとつて、おびの間へくるんで、自転車で市場の方へ出かけられたといふのは細かい叙写です。小さい二人の弟さんが、兎だ兎だ、い、なアとよろこぶところも気分が出てゐます。買つて来た箱には梨の絵がかいてあつたといふのも面白い。梨の空箱を兎小屋にした事実が分つて興味が加はります。兎に食べさせるせりをつみに出かける途々、弟さんたちが「おれんちには兎が二つあるよ」と、だれに言ふでもなく得意さうにどなつたり、小さい弟さんもまねをして「うちやぎ、うんとあるよ」と廻らぬ舌でしやべるところも、目に見るやうで、かはい、です。正子さんが工藤さんといふ女の子に会つて「あたしんち、こんどうさがあるの」といふと「そうお、見してよ」と言つてついで来、兎を見て「あらア、い、わね」とうらやむ対話もいき／＼してゐます。兎を箱に入れると、ちよつとの間きよろ／＼してゐたが、間もなく小さな格子の間からくびを出したといふのや、弟さんが、箱へさはつて見たり、うさぎをあやして見たりしてよろこぶところや、せりを一本もらつて「ちやア、やるよ」とつき出したりするところも感じがよく出てゐま

す。兎が鼻を動かして、もぐ／＼食べるのを、ちようどお婆さんが、かたいものを食べるやうだと言つたのも面白いです。子供の気持ちのよく出てゐる、無邪気な作篇です。（鈴木三重吉）

つまり、三重吉の評価が的確であることが分かる。「四年生としては、叙写が外廓的で、陰影が足りませんが、ともかく、すら／＼と渋滞なくかけてをり、終始うぶ／＼した純真さには、あまさせる、かはいらしい作篇です。」叙写としては、全編の対話がすていき／＼と実感的にかけてゐます。「正子さんが、兎の大きさをたとへて、大人の下駄ぐらゐだと言つたのは、子供らしくておもしろい。」「お父さんが『よしてきた』と箱を買つて来るのを請け合はれ、十銭、たんすの上からとつて、おびの間へくるんで、自転車で市場の方へ出かけられたといふのは細かい叙写です。」「兎が鼻まで動かして、もぐ／＼食べるのを、ちようどお婆さんが、かたいものを食べるやうだと言つたのも面白いです。子供の気持ちのよく出てゐる、無邪気な作篇です。」等々、三重吉は、子どもの綴方に対して的確な選評をしていることが分かる。わけても子どもの気持ち・表現のあり方までを含めて稠密な心配りが見られることである。

ところで、鈴木三重吉は、数え年十六歳の時、明治三十（一八九七）年四月の雑誌「少年倶楽部」〈前期〉第四号に、「亡母を慕ふ」の綴方を載せている。

亡母を慕ふ

広島県広島猿楽町

鈴木三重吉

木動かさざらむと欲すれば 風止まず 子養はむと欲するも 親待たず 思ひ廻らせば 余が九歳の秋 慈愛ふか、りし母上はふとせし病

にかゝりて枕につかせ給ひてより 日々に重らせ給ひ 医よ薬よと人々の看病怠りなきに 余は之を勞りもせて 学校より帰るや否や 稽古道具をなげやりたるま、唯遊びに余念なかりき。

一日 母上は 余を枕辺に呼び召されて息くるしげにくれ／＼と誠め給ひぬ 時しも 余は 母上の瘦せおとろへ給へる手もてなでさずり給ひつ、誠め給ひし詞の身にしみて そゞろに両の目に涙あふれけるが 泣き顔人に見られじと 詞の終るを待たで 飛ぶが如くに立ち去りぬ 思いきや此対面は 此世のなごりならむとは 遂に母上は無情の風に誘はれ給ひて 物さびしき秋の九月二十八日の夕ぐれに 桐の枯葉散り落つる諸共に 稚けなき弟を氣にし給ひつ、帰らぬ旅に出で立ち給ひぬ かゝる事のあらむと知りたらむには 日々枕辺に侍ひて 孝行の一端をも致しまゐらすべきに 剩へ最後の御詞に甲斐々々しき御返事さへせざりしを思へば 胸は裂け頭は破るる心地して 袂を噛み裂き畳をかきむしりて 声を限りに泣き叫びしも甲斐なし 扱も悲いかな 余の喜びを 両親と共にせむと思へど 母あらず又少しく物せばやと 之机によりて考ふれば 此一事の浮びて 為めに心気快からざりし事 果して幾回ぞや 天若し余が母上を呼び返し余をして考を尽さしめば 余が悦びは たとふるに物なしと 仰て天に訴ふれど天応ぜず 俯して地に願へど 地答へず 嗚呼天地何ぞ無情なる 嗚呼青苔白露の墓下に眠り給へる 我が亡き母上は 今や如何なる夢をか結び給ふらん。

右の三重吉の文章をどのように解釈すればいいのであろうか。明治期の綴方・作文教育の実態を証明しているとも捉えられる。つまり、文語

で認められており、なおかつ当時、大人たちや多くや文章読本のような参考書に記載されていた美辞麗句で文章が飾られていることである。にもかかわらず、母親を思う三重吉の心情が溢れていることである。筆者が問題としたいのは、母親であるふさが死去したのは、明治二十四（一八九一）年九月、三重吉九歳の時である。祖母であるれいが母代わりとなるが、腕白、負けずぎらいで、しかも神経質であったといわれる。母親を失った淋しさを補償するために母親の墓前で遊ぶ孤独癖もあり、広島

島の北部にある緑井に住む母親の姉が母に似ている、といわれ、恋い焦がれたともいわれる。成人しても自分の妻に母親に似ている女性を求めようになつたのである。その結果は自ずから明らかである。母親そのものを求めたとしても母親のような女性はいないのは当然であり、その結果は絶望のみ残らざるを得ないのである。その原点を示すのがこの綴方である。繊細な感情を抱持しているが故に神経質で孤独であつたというよりも幼い時に母親を失いユングがいうようなマザーコンプレックスを生涯持ち続けたことは推測できるであろう。第三高等学校在学中も胃病と神経衰弱に悩まされ続ける。東京帝国大学英文科に明治三十七（一九〇四）年に入學するも、神経衰弱のため、翌年九月に、一年間の休学の決意を固め広島の家や瀬戸内海に浮かぶ能美島で保養する。以上のような病歴からも分明の如く、病的なまでの繊細さを持つようになる。自分の二人の子ども、つまり、珊吉、すずに対する愛情は深いというよりも溺愛に近かつたと兩人が漏らされていることでも首肯できる。滑川道夫は、明治期の子どもの投稿した綴方について「当時の『作文』は学校教育として重んじられてゐたのであるが、これらの『作文』は、児

童の創造的所産としての文化であり、同時に、雑誌を通して一般の読者（児童）に与へる文化であつた事實は注目に値する。」と正確な評価をしていることである。したがって、三重吉が「赤い鳥」の児童文化活動わけても綴方教育で果たした役割の大切さを評価したいのである。

以上のことから分かるように、三重吉の子ども理解が深いのも、彼が幼い頃に、母親を失つていことが大きく影響している、と思われる。

ところで、山住は、子どもの綴方を指導する教師の改作や添削について批判的であり、「改作は、あるいは教師としての『指導』の範囲に入るかもしれない。しかし許し難い行動まであつた。それは金銭にまつわる問題である。『綴方教室』は好評、売れ行きは七、八十万部に達したといわれる。しかしそれは豊田一家には、何の収入ももたらさなかつた。このことについて豊田自身、『綴方教室』刊行から半世紀近くたつた一九八五年に、前掲『粘土のお面』の（あとがき）で次のように書いている。『そのうち私は身のまわりに、何んともフにおちない現象がおきているのに気がついた。あれほどの世間の評判が、私たち貧しい職人一家を経済的に何一つうるおしてくれていない事実である。『綴方教室』の編者である先生がすべて取り上げてしまっていることを、うすうすながら感じないわけにはいかなかつた。しかし私は、私の物を書く能力をひきだしてくれた恩人を、そんな風に考えるものではないと無理やり自分に信じ込ませて日を送つた。それと重なるように、私の家では父母の辛いごたごたが起きた。娘の私には手におえない問題だったが、私

は争う父と母に言葉通り身体をぶつけて事態を收拾しようとした。どちらをむいても、正視するにたえない大人のみにくい姿だった。世間の評判とはうらはらに、私は心の底から淋しかった。」<sup>(四)</sup>と述べつつ、綴方を指導する教師のあり方を問題とする。さらには、「まず教師からみて、子どもには見せたくない、聞かせたくない光景、あるいは言わせない表現が削除あるいは書きかえられている。」<sup>(五)</sup>と、確信を持って主張する。三重吉も『綴方読本』に於いて、子ども綴方を添削することを否定する。「本集の第五十六作篇『こぼやしすみ』のはじめの方に、ぼたもちをつくる叙写に、／＼ねいまが、にぎつちや、じゆうばこの、きなこにいれちや、またこんどは、おはちのあづきへ、いれちやします。」

／＼といふ微笑のわく、かはいらしい表出がある。これは、大人の口語や、大人の文でいへば、表出が変異であるが、子供だから許すべきであるのみならず、その変異そのもの、中に、児童性がどり出てるのである。／＼これを普通の大人の表出に直したとすれば、その独自性が失はれるばかりでなく、児童の作品へ一点でも大人の作為を混入した意味で作品の純正を汚したことになる。／＼児童の作品を添削して、その制作の如く装ひ、それをもつて、児童と、より多く自己との価を誇示するとなれば、それは言ふまでもなく欺偽である。教育者以外のある人はとき／＼『赤い鳥』の入選作を見て、これは、先生が直して出すのではないかと言つたことがある。もし教師にして、こんなことを言ふものがあるかと思つたら、それは、その人が綴方の指導をも児童をも理解せず、且つ恐らく綴り方を熱心に指導した例のないことの実証に外ならない。／＼児童はいろ／＼の点で、凡庸な大人よりも、はるかにえらいのである。／

以上は、低学年における綴方の出立の方策である、これは新規に或年級を担任して、その誤られてある綴方を転向させる場合の参考になる筈である。今言つた方式により、あらためて、上層的な第一歩から出直させるのが「一等よい。」<sup>(六)</sup>と、さすがに子どもの綴方のよさを知り尽くし者の発言であるが故に説得力がある。三重吉は大人では表現できない子どもの表現のよさを知り尽くしており、児童の持つ純粋さに信頼をよせていたことをも証す。それは、大正十（一九二一）年に「童心主義」を主張した北原白秋と同じ位置にいたことを証明することにもなる。教育者のみが子どもが理解でき、文学者は子どもが理解できる筈がないとの当時の小学校の綴方実践者の偏狭な考え方によつて三重吉の綴方指導の理論・方法が排除された面もなきにもあらずとの思いがするのは筆者のひがみであろうか。清水幸治は、「鈴木三重吉先生は生前十数回私の授業を参観せられて、指導方法の研究と本科教育の研究に資せられた。先生が実地指導に斯く度を重ねて出張せられた事は他に類例のない事で、これは私の教室に非常な興味を持たれたに外ならない。」<sup>(七)</sup>と述べていることから三重吉は綴方の授業実践にも興味・関心があつたことを示す。なお「大木君は個人指導に関して君は学級指導に関して事実を書くやうに」<sup>(八)</sup>と三重吉から話を受け、清水は、学級指導の経過の一部を整理しつつ、記録として纏めたことを『綴方教室』の「後篇に就いて」に述べる。このことから鈴木三重吉が綴方指導を実あるものとする為には、学級指導が充実していることが必要不可欠と把握していたことが読み取れるのである。したがって、清水が、「従つて私の書いた領域は私の学級指導経過の一部を整理した記録で、理論方面については、既に



『綴方読本』の生まれてゐる今日何等私ごときが喋々するの要を認めない。<sup>(九)</sup>と、率直に学級指導に於いて子どもをよく理解し、人間的交流を豊かに醸成することの必要感を率直に認識していることである。

したがって、『綴方教室』の後篇の冒頭に、「第一章 指導の実際」を位置づけ、綴方教育雑感——綴方教育の三昧境——指導系統案——指導案——成績物の処理——指導の三方面——推敲——鑑賞文の取扱ひ方法を正確周到に子ども綴方教育実践者の立場から述べる。最初の部分には「綴り方教育の革新が叫ばれて將に二十年。此の間幾多の分派的主張は出没したが、当初芸術家の一派が主張した『児童の本性を究めて芸術を基調とすべきである』との、所論が今日まで勝ち残つてゐる事は『綴方読本』に論じ尽されてゐるので、茲に重ねて喋々の要はない」と<sup>(十)</sup>ま言い切つてゐるのである。

さらに、「一体此の種の著書や講習会（綴方についての著書、講演会を指す 筆者注）を眺めてみると、児童の綴方教育とは凡そ縁遠い、文学論や芸術論を、六ヶ敷しい熟語や原語を並べて、こねまはしてゐるのが多い。こんな事の影響からか指導者も空理空論に走り易く、事実<sup>(十一)</sup>に直面して、それに立脚した確固たる自己の理論も信念もなく、右往左往浮き草の如く其の拠り処がはつきりしてゐない向が多いやうである。」<sup>(十二)</sup>とも述べつつ、その原因を他教科には教科書があるが綴方には教科書がないことをあげるのである。そして、清水は、綴方教育の向上を願う教師は、「少くとも三ヶ年間黙々として児童の作品を熟読含味せよ」と<sup>(十三)</sup>いうことを強調するのである。そのことを通して「それは児童文の本質把握の唯一無二の方法で而もそれは児童本然の姿の反映であるからである。

従つて本科指導の理論も方法も本科教育の信念も自ら生まれ出づべきである。要は児童作品を離れて何物もなしといふ自明の道理に帰着する。」<sup>(十四)</sup>と、綴方教師のあるべき要諦について述べる。そして、鑑賞指導は綴り方指導の向上の核に位置し、一回の指導には、作品中から二三篇の優良作品を選出し、鑑賞材料として指導することが必要であると述べる。そして学年毎の指導のあり方を紹介する。綴方指導案も手堅く纏められている。また中期「赤い鳥綴方」として多くの入賞者を出した北海道の木村文助は『村の綴方』（厚生閣書店一九二九年十二月）を纏め、著書として発刊する。その序に鈴木三重吉は「私が綴方の改革を叫び出したのは、従来の教育者たちが、綴方をもつて、単に、所謂文章の練習、言葉をかへていへば、自己の思想、感情を表叙するための技量の教養であると思なしてゐたのに対比して、綴方を人間教育の一つの教課に於てることの正当なる意義を主張するためであつた。綴方は十分なる意味においての一分派の芸術である。この芸術の本当の鑑賞と習作とによつて、児童のもつ生鮮な感覚を出来るだけ多く、こまかくし、その汚されざる純朴、真実な感情を保育し、同時に叡智を向上させて、けつきよく、人生を深く感受し、正しく凝視判断する意味での、人格的のうるほいを養ふことの重大な根本的教育の価値、それを私は飽くまで高潮しようとするのである。」<sup>(十五)</sup>と綴方教育の核心に位置する本質について述べる。つまり、人間教育と綴方教育とを一如のものとして把握しているのである。したがって、「児童のもつ生鮮な感覚を出来るだけ多く、こまかくし、その汚されざる純朴、真実な感情を保育し、同時に叡智を向上させて、けつきよく、人生を深く感受し、正しく凝視判断する

意味での、人格的のうるほいを養ふことの重大な根本的教育の価値」を高めることにある、と究めて明快に述べるのである。今日においても決して古びることのない目標であり、わけても自然とのつきあいを忘れた人間にとつても有効なものである。したがって、人間教育にその中心に据えた綴方教育を今恢復すべきである、と断言してもいいのではないだろうか。

ここで、三重吉が高浜虚子の主唱する写生文の影響を受けていることについて論究すべきであろう。三重吉は、『ホトトギス』四百号（昭和四年十二月）に次のような短文を寄せる。

四百号慶賀奉祝。ホトトギスの文学上の功績は、俳句の問題以外に、第一、虚子氏の写生文なるもの、創造と完成とによつて日本文の表現様式の根本的改命を成しとげたこと。

これ日本文学上、大区劃的な偉業であること云ふまでもありません。

つぎには小説家として価値ふかき虚子氏を作り上げたほか、大作家漱石先生や寺田寅彦、野上八重子（正確には弥生子筆者注）、長塚節、諸氏のごとき独自の芸術家を生み出した光輝もその永久の誇りとするに十分であります。

私も自己の表現の根本はホトトギスの感化によつて得たもので、処女作以下最初の作品の多くはホトトギスに載せて貰つた関係から、今は、ホトトギス文章部の旧卒業生のやうなものです。近来ホトトギスに小説や写生文の傑作が見えないのが遺憾です。

写生文を復興して文壇に独特の生彩を放たれんことを熱望します。

つまり、三重吉は、自らを『ホトトギス』文章部の旧卒業生と自認しているほどに、写生文から深い影響を受けていたのである。

また、「私が自分の好きな文章といふものを見出したのはホト、ギスの写生文である。その中でも四方太氏の文章が一番心持よく好きだった。今でこそ単に写生文といふものには、それほど重大な意味はないやうな気であるけれど、あの当時において、これまでの文章といふものに反抗して、真実な言葉をつかつて、真実な事相を写すといふ傾向を教へ導いたのは何といつての虚子氏、四方太氏の功績であると言はねばならない。それについては嘗て本誌（文章世界）で話したことがあるが、所謂写生文の創始といふことにおいて、真実なる表現と真実なる描写の態度といふことを最も著しい纏まつた意味において、日本文学史上に現出したのである。今の總ての人の表現法の基礎はみんなこの写生文に立脚してゐるとか、写生文から暗示されたとか、写生文から刺激をうけたとか、或は写生文に倣つたとかいつても、決して差支へあるまいと思ふ。

（傍線 筆者）それまでの文章や表現や創作の態度といふものは『魔風恋風』といふ小説や或は鏡花氏の文章や、紅葉や乃至一葉などの作物が代表してゐたものである。（中略）私が最初写生文に立脚した小説で自分の好きなものに逢着したのは寺田寅彦氏の『どんぐり』といふホト、ギスに載つた短篇であつた。これは今出して読んで、われ／＼の現在の作物の中にもつて来て見ても、猶且完全な意味で一つの傑作として推奨することが出来る。」（「上京当時の回想——処女作当時」<sup>十五</sup>）と三重吉が、写生文から深い影響を受けたことを回顧する。わけても「真実な言葉をつかつて、真実な事相を写すといふ傾向を教へ導いた」功績は、こ

れまでの美辞麗句、つまり虚言を平然と使用した来た書簡文に代表される文章道に対する否定・超克であつたともいえるのである。したがって、鈴木三重吉の綴方教育論の中軸に位置させるようになるのは当然の帰結である。また、明治四十（一九〇七）年十二月二十五日、広島県山県郡加計町加計正文へ宛てた手紙に「拜啓／多忙なので久しく御無沙汰をした。論文は実に厄介だ。二月中に拵へ上げて三月四月で英訳する積りであるんだ。小生のは小説の写実法といふ問題だ。（以下省略）」<sup>（下五）</sup>

と、東京帝国大学の卒業論文の題目に「小説の写実法」を選んでいることが分かり、三重吉が文章を書く基底に位置する文章技術として写実・写生に興味・関心を抱いていたことは分明である。こうして最初写生文に出会つたのは、寺田寅彦の「どんぐり」（『ホトトギス』第八巻第七号明治三十八年四月には「困栗」と漢字で書かれている 筆者注）であり、三重吉の作品「金魚」「水」などにもその影響があることを告白する。三重吉は『ホトトギス』を中学校三年生の頃、友人から借りて読み、三高（今の京都大学）時代自ら求めて読むようになったと回想する。寺田寅彦の「どんぐり」は、小宮豊隆編『寺田寅彦随筆集第一巻』（岩波書店一九九七年五月）の冒頭に掲載されているので手に取って見ることが出来るであろう。妻を失つた哀しみと妻の残した子どもの姿を通して妻のことを想起するという構成が寅彦の心に絶えず揺曳する感情であるが故に、三重吉の心情・感情に惹きつけられたものと感じられる。わけても「どんぐりを拾って喜んだ妻も今いない。お墓の土には苔の花がなんべんか咲いた。山にはどんぐりも落ちれば、鶉の鳴く音に落ち葉が降る。ことしの二月、あけて六つになる忘れ形見のみつ坊をつけ

て、この植物園へ遊びに来て、昔ながらのどんぐりを拾わせた。こんな些細な事にまで、遺伝というようなものがあるものだから、みつ坊は非常におもしろがった。五つ六つ拾うごとに、息をはずませて余のそばへ飛んで来て、余の帽子の中へひろげたハンケチへ投げ込む。だんだん得物の増して行くのをのぞき込んで、頬を赤くしてうれしそうに溶けそうな顔をする。争われぬ母の面影がこの無邪気な顔のどこかのすみからチラリとのぞいて、うすれかかった昔の記憶を呼び返す。（以下略）」の箇所は、かつて三重吉も母を喪い、母親の墓で遊ぶ孤獨癖を持つたこともあつたが故に鮮烈な印象を持つたことは当然と考えられる。この寅彦の文章も写生文の影響を受けていることは一目瞭然である。

大正七年七月発行の雑誌「赤い鳥」第一号は、募集作文として八編が選ばれる。その「選後に」では、次のように述べる。

以上八つの作文は、私の手もとに集まつた、二百七十点の中からみんなのお手本になるやうなよいものばかりを選びぬいたのです。「てんかん」と「お人形さん」とだけは、私がいらぬところを少し削りました。そのほかは、すべてを通じて、字の間違ひと仮名づかひの誤りをただしたゞけで、一寸も他人の手は這入つてをりません。すべて大人でも子供でも、みんなかういふ風に、文章は、あつたこと感じたことを、不断使つてゐるまゝ、のあたりまへの言葉を使つて、ありまゝ、に書くやうにならなければ、少なくとも、さういふ文章を一ばんよい文章として褒めるやうにならなければ間違ひです。（傍線 筆者）この八つの作文は、どんな立派な芸術家に見せても、みんな驚いて褒めてをりました。全く少しの厭味もない、純麗なよい作文です。

みんなよいから、みんなに御褒美を上げました。（以下省略）<sup>十七</sup>

つまり、筆者が傍線を付した文章からも分明な如く、写生文の影響を色濃く受けていることである。したがって、美辞麗句を並べ、常套句をきらびやかに並べ立てたような文章から訣別したのである。三重吉の文章「亡母を慕ふ」の文章はその美文の影響を受けていたことは明白である。

以上、鈴木三重吉は、「赤い鳥」の標榜語にもある「○『赤い鳥』」は、只単に、話題の純清を誇らんとするのみならず、全誌面の表現そのものに於て、子供の文章の手本を授けんとする。「○ 今の子供の作文を見よ。少なくとも子供の作文の選択さる、標準を見よ。子供も大人も、甚だしく、現今の下等なる新聞雑誌記事の表現されてゐる。『赤い鳥』誌上鈴木三重吉選出の『募集作文』は、すべての子供と、子供の教養を引受けてゐる人々と、その他のすべての国民とに向かつて、真個の作文の活例を教へる機関である。」と大胆な表現の背後にあるのは、自分の文学に行き詰まりを来したとか、多くの借金を返すための仕事といったこととは別の情熱を感じるのである。わが子らず・珊吉が生まれ、その子どもに「純麗な読み物を授ける」「世俗的な下卑た子供の読みものを排除して、子供の純性を保全開発するために、現代第一流の芸術家の真摯なる努力を集め、兼ねて、若き子供のための創作家の出現を迎ふる、一大区劃的運動の先駆である。」等々、三重吉の高揚する気持ちとその仮文章に反映する。つまり、ここに鈴木三重吉の綴方教育論が成立するのである。

## 二 『綴方読本』の特質・特徴の一斑について

鈴木三重吉は『綴方読本』の冒頭に、「一、教課目的の無自覚」をあげ、当時の綴方教育実践者の著書を批判の対象にする。「偏局せる或生活観——意味の分からない或生活指導論」とサブタイトルを付して次のように述べる。

これまで多くの綴方の研究家の理論や作品の批判や、多くの学校での綴方の実際教育には、いろ／＼の誤謬と欠陥がある。

その最も主要なものを上げると、第一には、それらの関係者の多くが、根本に、綴方教育の意義そのものを的確につかみ得てゐない、言葉をかへて言へば、おたがひは、綴方によつて教育上、いかなる効果を上げようとするのか、その教育目的を正常に自覚してゐない、その不徹底さである。

多くの人は、最初に私から出た「生活」といふ言葉の音響をうけついで、綴方を生活指導の教課と称してゐる。それでは「生活の指導」とはどんな事柄を意味するのかとなると、或人は「生活」なるものをひどく偏局した皮相的なものに解してをり、その指導といふことも、実さいにやりとげ得られない、抽象的な表掲そのものに尽きてゐる。

例へば最近に、或地方の教師が二十年の実際経験によつて、綴方の実際指導の全項目を叙説したと誇称する「児童文の教壇実践」といふ本が出た。この本では、「綴り方の分野で意味する」児童の生活とは「いつも、綴方をかきたい、か、ないではゐられないやうな意欲に満ちた生活でなければならない」と言ふやうな、強制的な偏見をかゝ

け、かゝる生活をもち来すためには、外部の刺激によつて児童の生活環境を整理する必要があるなぞといふ空論を吐いてゐる。生活環境の整理などといふことが、果して、われ／＼に出来得る、何を意味するのか。<sup>十八</sup>

つまり、三重吉は、「生活」の内容・概念がきわめて曖昧であることを追求するのである。「又中には、そのいはゆる『生活指導』とは所詮何の意味だか全然補足出来ないやうな、混乱を尽くした駄弁をならべて得々としてゐる人もある。一例を上げると『生活させる綴方の指導』といふ本にはこんなことが言つてある。／＼この人に従へば『従来 of 生活なるもの、観方は、お互の生活を、家庭生活、学校生活、社会生活、某の生活といふやうに区分したもので、そのおの／＼が一さい相関与しないことを理想としてゐる』さうで、これでは『ほとんど生活の愛着といふものに欠けてゐる』さうである。と述べつつ、<sup>十九</sup>「それが具体的に説明してないので、実像がはつきりうかんで来ない。」<sup>二十</sup>と三重吉が述べることは首肯できる。つまり、綴方と生活指導がどのように関連しているのかが見えてこないというのである。『生活させる綴方指導』は、千葉春雄の著書である。千葉は、「綴方の生活指導といふのは、一つは、綴り方に要求する本当の生活を生活させるために、常に生活の解放を具案詩実施することである。子供のもつ具体的生活の充実をはかり、人間性に富む生活を憧れさせる態度の養成である。概念の生活観を否定して具体的な生活を建設させることが生活解放の主要な任務である。」<sup>二十一</sup>といひながらも、具体的な指導が問題とされるのである。「その作の荒筋を言ふと、その児童が、学校の建物の出口におちてゐた、白と赤との白墨のき

れがほしくて、拾つてかへる。その夜寝間着と着かへるときに、その白墨がポケットからころがり出る。女中にそれを見つかり、どうした白墨かと聞かれて、先生にもらつて来たのだと、ごまかしておく。／＼しかし、その直後、それを無断でとつて来た非行を悔い、翌朝、三十分も早く学校へいつて、先生の箱に入れて、ほつとしたといふ、これだけの推移をかけた、至極平浅な作篇である。」<sup>二十二</sup>と三重吉は、論評するのである。千葉の主張する「生活」の概念が明確でないことは明白である。したがつて、三重吉の述べるやうな人間教育と綴方の実践を一如として把握する教師の揺るぎない教育観が求められるのである。ペスタロッチーが主張するような生活陶冶 (Das Leben ist redend) を根底に据えなければならぬのである。

また、三重吉は田上新吉の「描写論」についても田上が引用する作品を検討しつつ、三重吉の「叙写論」を展開するのである。田上は描写論について「第六章 描写論」を当てる。このことから田上が、綴方教育で描写論を重視していることが分明となる。田上の描写論を次に紹介する。

然らば、「描写」とは何を意味するか。私は此の問いに対して簡単にかう答へたい。それは——客観性を帯びた表現の手法——と。つまり、題材に対する作者の態度から出発した表現の一手法に過ぎないのである。文学上に於ける彼の「写生」とか「写実」とかいふことも其の内容着眼眼の上に多少の相異こそあれ、其の根底に於いてはたしかに同一方向に向つてゐるものだと私は思つてゐる。

「描写」と対立して、「説明」といふ言葉がよく用ひられる。「描

写」に用ひたと同じやうな筆法で「説明」といふ言葉を定義するならば、それは——主観性を帯びた表現の手法——と言つてよからう。これ亦題材に対する作者の態度から出発した表現の一手法に過ぎない。

「説明」はまた之を時間的記述に用ひて「叙述」と呼ぶこともある。

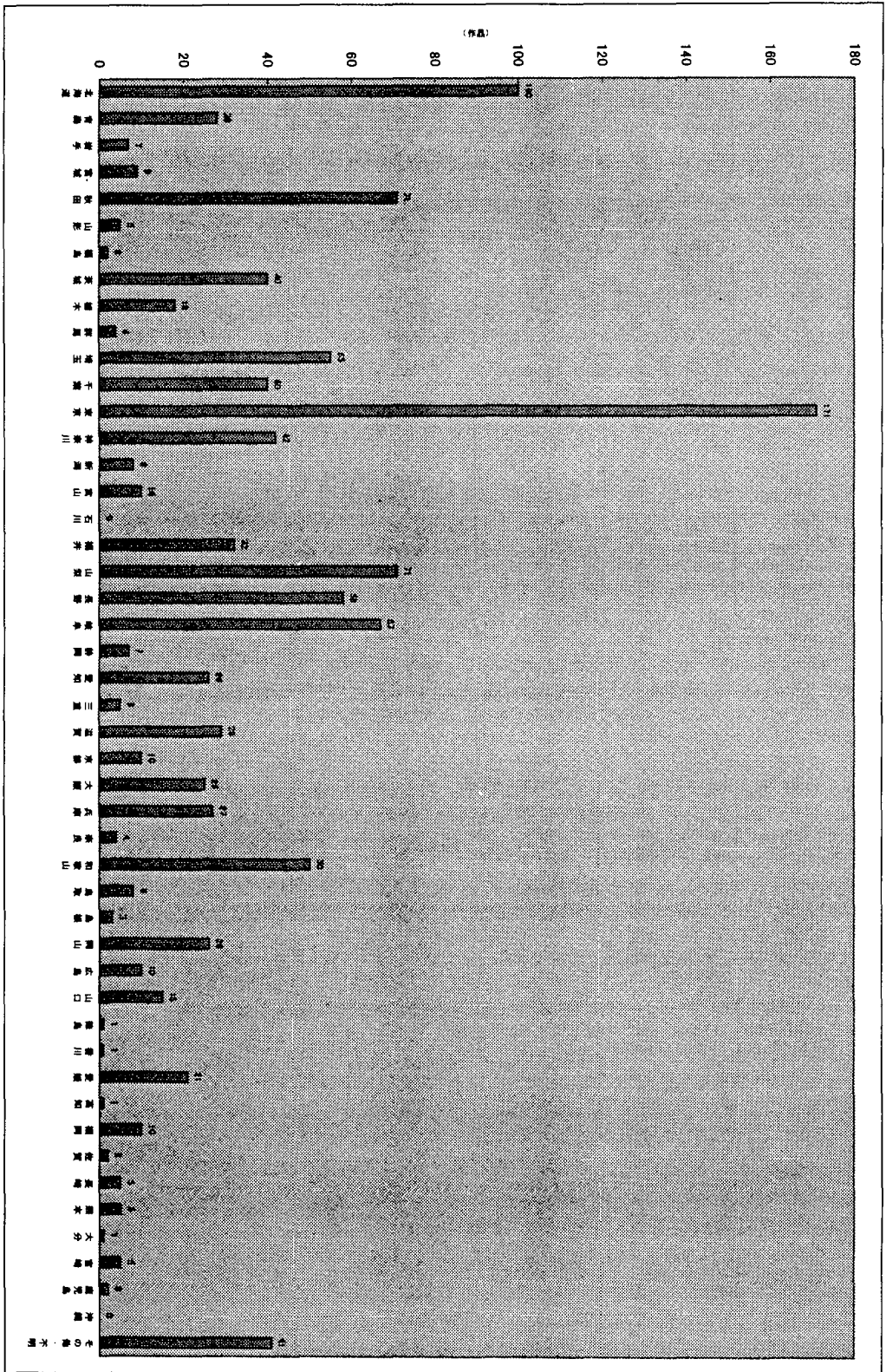
元来芸術は吾々の美意識の所産であり、感情の表出である。而してその美意識とか感情とかの根元は吾々の主観であるから、吾々は此の根元たる主観を本にしてそこに起つた感じ、心持をそのまま、表現しなればならぬ。——これが主観主義の芸術観であり、創作態度である。<sup>(三十一)</sup>

つまり、田上の「描写論」は近代文学史の「描写」の推移の考察から導き出されたものである。「第二節明治以前の文学に現はれたる客観的色彩」「第三節明治文学に現れたる写實的傾向」「最近の文学に於ける描写と主観的傾向」の構成からも窺い知ることができる。それに対して三重吉は、「特にすぐれた美感的な表現は、普通の人々の言つてゐる精緻な観察だの、微細な観察だのといふ、常套的な言葉でおほうには、あまりに貴い。事象の、例へば写真にでもとれるやうな、だれでも目にし得る外面のすべてを、くはしく見た、こまかに見た結果といふ以上に、その多くが、普通には、目に見えない、人には感じ得ない、又は、ほんやり感じて、言葉に表はし得ない、ひそんだ或ものを、鋭敏に受象したものである。／例へば『海の鳴る音のまん中でじつとしてゐると、とき／＼気がとほくなるやうだ』『浪の音がすぐ下で、家につかつてくるやうだ』『耳をすますとにぎやかなかさげび声が聞えさうだつた』『かけろが立つてゐて、どこからか何か小さな音が、みじ／＼といふやうに

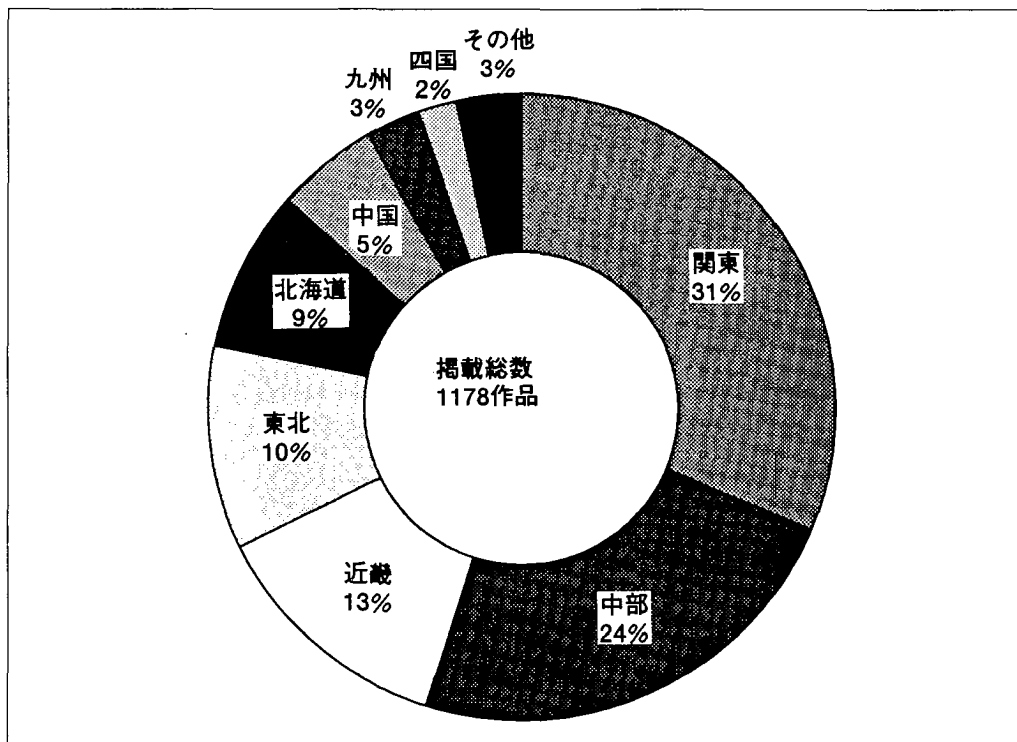
してゐる』『空も海も一つになつて空の中に白帆がういてるやうだ』『人の声が、流れの音の中から出て来るやうだ』など、いふ表現がそれである。私は、かゝる敏感的な感受の叙写を特に『感覺的な叙写』とよんでゐる。／『感覺的』といふのは、「今言つたごとき叙写の深度を呼ぶ、便宜上の名前である。単に『感覺の働きから得來つた叙写』といふ意味ではない。たゞ事象の表面を普通の感覺の一つなる視覚によつてこまかく見たといふのとちがひ、もつと奥まつた叡智と、細化した感情とのたすけとを併せた、鋭尖な感覺から得た叙写といふことを簡約した名稱である。」<sup>(三十四)</sup>と述べつつ、叙写論が、常に子どもの文章・作品に即して説明される。写真↓絵画↓活動画↓芝居に例を取りながら説明がなされる。したがつて、三重吉は具体的な場面に即しながら、表現（言葉）を吟味するのである。田上の「描写論」は近代文学史から学んではいるが、それは子どもの表現レベルにまで下りていない恨みが残るのであり、そこにも三重吉の綴方教育論が子どもの心・感性を豊かに掬い取つていることが分かる。「一 展開記叙と総合記叙」「四 鑑賞による刺激誘導」等々、綴り方指導の重要な示唆を含む論もあるが、今回は触れることができなかつたことをお詫びする。

おわりに

今回は、「赤い鳥」を発売した鈴木三重吉の綴方教育論を『綴方読本』（中央公論社一九三五年十一月）を第一次資料として、さらにはそれを補う形で雑誌「赤い鳥」「鈴木三重吉全集」（岩波書店一九八二年六月）



グラフ① 「赤い鳥」綴り方入選者の県別内訳



グラフ② 綴方入選者の出身地域

前期(大正7. 2~12. 11)

順位	都道府県	掲載数	%
1	東京	66	14.4
2	長野	50	8.4
3	山梨	46	7.7
4	北海道	31	5.2
5	埼玉	29	4.9
∴	∴	∴	∴
	計	596	100

順位	都道府県	掲載数	%
1	東京	70	26.8
2	秋田	33	12.6
3	青森	28	10.7
4	千葉	14	5.4
5	岐阜	12	4.6
	和歌山	12	4.6
∴	∴	∴	∴
	計	261	100

中期(大正)13. 1~昭和4. 3)

順位	都道府県	掲載数	%
1	北海道	61	19
2	秋田	35	10.9
3	岐阜	34	10.6
4	埼玉	16	5
	神奈川	16	5
	滋賀	16	5
∴	∴	∴	∴
	計	321	100

グラフ③ 綴り方入選作者の出身都道府県ベスト5



等を第二次資料として用いた。雑誌「赤い鳥」も前期、中期、後期とあるが、グラフ①では、「赤い鳥」綴り方入選者の県別内訳、グラフ②では、綴り方入選者の出身地域、グラフ③では、綴り方入選作者の出身都道府県ベスト五を示したものである。この考察も次の機会とさせて頂きたい。今回、平成九年度佛教大学研究助成金でこの研究がなされたことを報告させて頂き、衷心より感謝の意を表したい。

注

(一) 豊田正子著山住正己編『新編 綴方教室』(岩波書店一九九五年七月)三七〇

〜三七一頁さらには、山住は「この『赤い鳥』綴方を、なお、もの足りない」と判断したが、主として東北の、後に生活綴方運動といわれる動きをつくりだした教師たちであった。それは、貧困と封建的因習のなかで暮らす子どもたちの教育にとりくんでいた教師であった。彼らは、『赤い鳥』の評価する綴方は、大都會の山手に住む子どもたちの作品にかたよっているとみて、「詩人に里子に出した子どもたちを私たちの手にとりもどそう」と提唱し、運動をおこしたのである。それは、東北や山陰などの農村だけでなく、東京の下町の教師たちにも支持されていた。」と述べ、生活綴方教育・運動が『赤い鳥』綴方教育のアンチテーゼとして生まれたことを主張する。

(二) 前掲書三七二頁 その根拠として、「豊田正子の家庭もまた、その恐慌によって大変な苦勞を強いられていたのである。」をあげる。それは貧困と封建的因習のなかで暮らす子どもたちにその生活を綴らせた北方の教師たちの生活綴方教育とも繋がるのである。

(三) 滑川道夫『児童文化と国語教育』(岩波書店一九四一年四月)一八五頁

(四) 豊田正子著 山住正己編『綴方教室』(岩波書店一九九五年七月)三七九〜三八〇頁

(五) 前掲書三七七頁

(六) 鈴木三重吉『綴方読本』(中央公論社一九三五年十二月)五三二〜五三三「言葉の表現と製作の態度」の最後に書かれている。ちなみにここでは、「表出、表現の意義——絵との比較——表出の簡朴と純感——標準語と方言——方言の許容——叙写の活現と方言——表現の外形的内容の純正——純正なる表現の効果——純正なる表現と叙写の実感——純感なる叙写の加速度的効果——製作の態度——態度の二様のあらはれ——作品の品格——作品の品格と作家の品性——高年級の作品における態度の純感性」の目次からも分明の如く、綴方の指導のステップが綿密に計画されている。

(七) 大木頭一郎・清水幸治共著『綴方教室』(中央公論社一九三七年七月)三〜四頁

(八) 前掲書四頁 木村不二男に本書の題名その他について世話になったことを最後に述べる。木村不二男の父親は木村文助であり、『村の綴り方』(厚生閣書店一九二九年十二月)では、鈴木三重吉の序文を貰っている。

(九) 前掲書 四頁

(十) 前掲書 百七十一頁「……指導者の大部分に確固たる綴方観もなく指導信念もなくして、児童側からのみひとりでに傑出した綴方の生まれて来る筈がない。作品の低劣さはまだしも、歴然たる剽窃文に接してさへも、口に児童生活、個性尊重の教育を高唱し乍ら、其の児の当然生み得るものなるや否やをも識別し得ずして優秀作として公衆の面前に曝す人があるに至つては、苦笑を禁じ

得ない。」と清水は述べる。

(十一) 前掲書 百七十一～百七十二頁

(十二) 前掲書 百七十二頁

(十三) 前掲書 百七十二頁

(十四) 木村文助「村の綴り方」(厚生閣書店一九二九年十二月) 一頁そして、「村

の綴り方」中の作品に、人生の悲惨面をえがいたものがあるのを抗議してゐるとか聞いた。「村の綴り方」には、さういふ方面で陰惨なものもある。しかし、

私は、それらの作品をも推賞して以上、一個の教育的批判として、子供がたまた

／＼人生の或種の暗黒面をのぞき見て、それを綴り方に取り扱ったことをもつて、教育上、好ましくからざること、十把一からげに否定するものでないことは言ふまでもない。」と生活綴方的な文章についても肯定的に受けとめているこ

とが分かる。

(十五) 鈴木三重吉『鈴木三重吉全集』第五卷(岩波書店一九八二年六月) 三十一

三十一頁

(十六) 鈴木三重吉『鈴木三重吉全集』第六卷(岩波書店一九八二年六月) 百四十

八頁 書簡番号一六七

(十七) 雑誌「赤い鳥」第一号(赤い鳥社大正七(一九三三)年七月一日発刊)

(十八) 鈴木三重吉『綴方読本』(中央公論社一九三五年十二月) 四百六十七～四百六十八頁

(十九) 前掲書 四百六十八頁

(二十) 前掲書 四百六十九頁

(二十一) 千葉春雄『生活させる綴方指導』(厚生閣書店一九二八年十二月) 四百六

十九頁

(二十二) 鈴木三重吉『綴方読本』百六十九頁

(二十三) 田上新吉『生命の綴方教授』(目黒書店一九三五年十月) 二百七十六～二

百七十七頁 「第六章 描写論」(第一節)「描写とは何ぞ」に述べられたものである。

(二十四) 鈴木三重吉『綴方読本』(中央公論社一九三五年十月) 五百四十七頁

八 叙写の深度では、「白地図的記述と着色密画的描写——輪廓的描出——実例の比較一——実例の比較二——対話と人物の活写——或空虚なる自然描写論——陰影的叙写の例示——叙写の極点——感覺的叙写——自由詩と感覺的叙写」について論が展開され、深められる。

(おかや あきお 教育学科)

(一九九七年十月十六日受理)